

第53回四国地区人権教育研究大会に行ってきました。

1 開会行事、企画行事、全体会

(1) 開会行事

- ①開会行事 ②あいさつ ③祝辞 ④来賓紹介
⑤祝電披露 ⑥閉会のことば

(2) 企画行事

響心太鼓 香川県立聾学校

(3) 全体会

- ①開会のことば ②基調 ③次期開催県あいさつ
④閉会のことば ⑤諸連絡



【会場】香川県県民ホール 平成18年6月29日



【演奏】香川県立聾学校 中学部、高等部の生徒のみなさん

「四国はひとつ」を合言葉に本年度で53回を迎えた四国地区人権教育研究大会。これまでに取り組んできた同和問題をはじめ、さまざまな人権問題の解決をめざし、四国の多くの仲間と共に取り組んできた着実な歩みを踏まえて、本研究大会の意義や今後への期待が基調の中で確認されました。

企画行事では、香川県立聾学校の中学部11名、高等部7名の18名の生徒による、紅白に分かれて太鼓の響きを競い奏でる演奏会。心揺さぶる、勢いのある力強い響きが会場全体を包み込みました。

2 分科会

(1) 発題Ⅰ

「四国学院大学での『部落問題論』授業」

喜岡 淳さん（四国学院大学「部落問題論担当」）

(2) 発題Ⅱ

「郷土の部落史を教材化して」（10カ年を顧みて）

井澤武大さん（高知県春野町人権・同和教育研究協議会）

(3) 発題Ⅲ

「部落史認識の転換について」

吉村智博さん（大阪人権博物館）



【会場】高松市生涯学習センター<第5分科会>

平成18年6月29日～30日

第5分科会（大学教育）では、部落史研究を教育・啓発につなげていくために、どのような取組が必要か、2日間にわたり発表者からの提案、質疑応答、協議と大変盛り上がりしました。報告では、部落史を部落史として教えるのではなく、部落史を学習者の身近な課題として、とらえ直すことができる教材の在り方が論議されました。他人事ではなく、自分事として重ねて考え、人権問題に立ち向かっていける人材を育成していくことの大切さが確認されました。